

論 説

ナチスに抵抗したアウシュヴィッツの囚人女性医師
—— エラ・リンゲンス ——

伊 藤 富 雄

目 次

はじめに
逮捕まで
アウシュヴィッツへ
医師としてのエラ・リンゲンス
収容所での「選別」
収容所での「出産」
アウシュヴィッツからダッハウへ
再びウィーンで
おわりに

は じ め に

拙論『「アウシュヴィッツの天使」と呼ばれた修道女アンゲラ・マリア』の中でアウシュヴィッツへ囚人として送り込まれた一人の「ドイツ国籍」の女性医師エラ・リンゲンスのことに簡単に触れたことがある。¹⁾ 彼女は修道女アンゲラが亡くなるほぼ10カ月前の1943年2月にアウシュヴィッツ絶滅収容所に送り込まれている。従って二人は10ヶ月間はアウシュヴィッツに共にいたことになる。当時アンゲラは看護師として囚人病棟ではなく、SS（親衛隊）の野戦病院で働いていたが、時には抜け出して囚人患者の面倒も見ていたようである。そうした「アウシュヴィッツの天使」と呼ばれたアンゲラのことを同じ医療に携わる医師のエラが耳にしなかったことはないはずだし、アンゲラにしても自分と同じように身を危険に晒しながらも、他の囚人たちのために献身的に働いているエラのことを知らなかったはずはないと思われる。しかしながら戦後まで生き延びたエラはアウシュヴィッツの体験を幾つかの文章で詳細に語ってはいるが、アンゲラの事には触れていない。本稿では囚人として、また唯一の「ドイツ国籍」医師としてアウシュヴィッツを生き延びたエラ・リンゲンスの生涯を辿ると同時に、彼女のアウシュヴィッツ絶滅収容所での体験を元に、絶滅収容所の実態およびナチスによるユダヤ人大量虐殺の恐怖の実態をも明らかにしたい。

1) 伊藤富雄:「アウシュヴィッツの天使」と呼ばれた修道女アンゲラ・マリア 立命館経営学第48巻第2・3号, 2009年, S.51～70.

逮 捕 ま で

エラは 5 人兄妹の末っ子として 1908 年 11 月 18 日にウィーンに生まれている。彼女は父親に関しては殆ど触れておらず、他の資料でも父親のことは殆ど出てこないし、職業なども不明である。しかし残されている家族写真などから見ると彼女の家庭は比較的裕福だったように思われる。また家族の国籍に関しても 1918 年のハプスブルク帝国崩壊後、父親が家族のためにユーゴスラヴィア国籍を取得したことは判明しているが、それ以前の国籍がどうだったのかは不明である。

彼女が生まれた時、医師は母親に「この子は非常に丈夫な子になりますよ」と告げた。²⁾ それは上の兄姉たちが聴力障害などに悩まされていたからである。エラは兄姉たちとは異なり、子供の頃から母親とは上手くいかなかったようである。彼女はそうした母親との関係を自ら告白している。

「私は幼かったため、年上の兄姉たちの聴力障害のことは殆ど分からなかった。そのため、母は上の兄姉たちだけには優しく親切で、私だけは別で、のけものにされている、と感じていた。(。。。) 兄姉たちは私のことをとても可愛がってくれて、私にはとても大切な人たちだったが、母親はそうではなかった。」³⁾

さらに彼女は母親がそもそも自分が生まれてきたことを喜んではいなかったこと、それどころか自分が生まれてきたことで母親は「死ぬほど不幸になってしまった」とエラの目の前で親戚や友人たちに話したことも記している。⁴⁾

こうしてエラと母親との溝は彼女が成長するにつれ、深まっていくばかりだった。

1920 年、エラはウィーン 1 区のリツェーウム (女子高等中学校) に入学する。入学後、彼女は社会主義の学生団体に加入し活動するが、その理由は政治的な理由ではなく、偏に母親の嫌がることをしたい、との理由からだった。

「私が社会主義に向かった主たる理由ですか？ (。。。) ある時私は母親が我が家のお手伝いさんにこう言ったのを耳にしたからです。〈ティニー、玄関の戸締りをしておくように。アカの連

2) E.Lingens: Gefangene der Angst: ein Leben im Zeichen des Widerstands. (Hg.von Peter M. Lingens.) Berlin, 2005, S.19.

3) M.M. Scheuba-Tempfer: Dr.Ella Lingens. Wien, 2005, S.25.

4) ebd., S.7.

中が入って来れないようにね)。その時私は思ったのです。母親が恐れている運動に私も加わりたいと。」⁵⁾

この社会主義の学生団体での経験が後に、ナチスに抵抗し、ユダヤ人を助ける運動に傾いていったのではないかと推測される。

1928年12月、エラはウィーン大学法学部に入学手続きを行なう。彼女は当初「経済学」を専攻するつもりだったが、「法律を学ぶ方がはるかにベター」であり、「法律家は他の大卒者よりも優れている」との友人の言葉を信じ、自分も「優れた人物」になりたいと思い、法学部に入学したのだった。⁶⁾

1930年、22歳の彼女はドイツでナチ党が躍進したことを知り、驚いてすぐさま図書館へ行き、ヒトラーの『我が闘争』を読む。そしてユダヤ人のヨーロッパからの排除、彼らの計画的根絶などを知らされ、大いにショックを受ける。⁷⁾ またこの時期に彼女は社会民主党の国会議員が政治状況に関して報告する集会に参加し、当の国会議員を含め、多くの人々がナチスによる危険性を「過小評価」していることを知る。

1931年11月、最後まで理解し合うことのなかった母親が死亡する。

1932年、彼女は将来の夫となるクルトと知り合う。

「クルトはとても素晴らしい人だった。背が高く、本当の金髪だった。まるで溶かした黄金のようだった。また17歳の女の子のような肌の色つや、素敵なお手、青い目を有し、素晴らしい容姿だった。」⁸⁾

またこの年の5月、エラはウィーン大学に博士号の学位を請求している。

エラより4歳年上の夫クルトは1933年には既に反ナチスの学生グループに所属し、活動していた。そのため彼はドイツ人でありながら、ドイツの大学で学ぶことはできなかった。しかしながら彼の父親は当時ケルンの警察署長だった。父親はその地位にものを言わせて、息子がドイツの大学で学べるよう手配し、クルトはドイツの大学で医学を学ぶことになった。またクルトが1935年に外国のスパイと係わり合いになったとの容疑で秘密国家警察に逮捕されたが、その時も父親は逮捕3日後にはクルトを釈放することができた。父親はクルトの兄がミュンヘンで逮捕されたときも、現地まで出かけて行き、逮捕2日後には兄を釈放させている。そ

5) E.Lingens, a.a.O., S.20.

6) M.M. Scheuba-Tempfer, a.a.O., S.17.

7) E.Lingens: Das Versprechen. In: M.Horsky (Hg.): Man muß darüber reden. Wien, 1988, S.72.

8) M.M. Scheuba-Tempfer, a.a.O., S.25.

のためにエラ、クルト両名は少々危険なことに首を突っ込んで、父親が何とかしてくれるのでは、と油断してしまうことになる。⁹⁾ エラによれば、彼はナチ黨員ではなく、当時としては「ナチ黨員証」を持っていない唯一の警察署長だったという。1936年、彼は中央党に近い政治的立場故に、ナチスによって警察署長の地位を追われてしまう¹⁰⁾。

法学の学位を有し、本来は弁護士として働くつもりだったエラは「ドイツ国籍」ではなかったため、相応しい職には就けなかった。そのため1937年、ウィーン大学へ再入学し、医学を学ぶことになった。二人は1938年3月に結婚する。この結婚によってエラは「ドイツ国籍」を取得することになった。この頃から二人の友人や知人たちの多くがナチスの暴力から逃れるため亡命し始める。反ナチの活動を続けていた夫のクルトも、亡命して外国で自由に暮らしたいと願った。しかしエラは、まともな人間ならばこの地に留まるべきである、との確信から、夫を説得した。

「〈あんな連中にこの国を完全に引き渡すことはできないわ。〉私たちはドイツに留まることで意見が一致したが、夫はこう提案した：〈でも一つだけお互いに約束しよう。もし誰かが我々の援助を必要とした場合には、我々は決して〈ノー〉とは言わないことを。〉この約束を私たちは守り通した。」¹¹⁾

1938年11月9日、いわゆる「帝国水晶の夜」が生じる。これは二日前の7日にパリのドイツ大使館の書記官がポーランド系ユダヤ人少年に射殺されたことの報復として、ドイツ国内の主要都市でユダヤ教会のシナゴークが焼き討ちされ、さらにユダヤ人商店が破壊された事件である。破壊された商店のガラスが「水晶」のように輝いていたことから、そう呼ばれた恐怖の夜のことである。この日、エラ夫妻は10名のユダヤ人を自宅に匿った。夫妻はある医学生および弁護士と彼の女友達の5名で密かにユダヤ人を助けるグループを結成していたのだった。その活動のことをエラは控え目に評価している。

「私たちが企てていることの全ては焼けた石の上に落ちる一個の水滴以上のものでないことは分かっていた。」¹²⁾

リングェンス夫妻が秘密国家警察に逮捕されることになった背景には、ポーランド分割のため

9) E.Lingens, Das Versprechen, a.a.O., S.74.

10) ebd., S.74.

11) ebd., S.74.

12) Sabine Loitfellner: Widerstand in Österreich 1938 bis 1945. Wien, 1997, S.5.

に結ばれたヒトラーとスターリンの密約があった。この密約ではポーランドの分割だけでなく、それぞれが逮捕していた 20 名の共産主義者とドイツ人エンジニアとを交換させることも含まれていた。この交換でスターリンはヒトラーに一杯食わせたのだった。すなわち、20 名のドイツ人エンジニアの中に 6 名のユダヤ人を含ませていた。そしてその中の一人がリングェンス夫妻の友人だった。ナチスはソヴィエトの監獄に 3 年入っていたその友人を秘密国家警察のスパイとして、ドイツ国内の共産主義者の中に送り込もうと考えた。しかしながら彼はそれを拒否し、ナチスから逃れるために国外へ逃亡しようとし、その手助けをリングェンス夫妻に求めたのだった。

同じ頃、リングェンス夫妻はある友人の叔父をクリンガーという名前の男を通じてハンガリーのブダペストへ国外逃亡させることに成功していた。そのためリングェンス夫妻はそのクリンガーに友人を含めた 4 名の人物の国外逃亡を頼んだのだった。実はクリンガー自身もユダヤ人であり、強制収容所送りされるのを免れるために秘密国家警察のスパイとして働いていたのだった。リングェンス夫妻は彼のことを全面的に信頼せずに、慎重に事を運んだが失敗してしまった。

「それはクリンガーという人物で、俳優であり、明らかにとても人の良さそうな人物だった(。。) 彼は、まだクラカウにいる私たちの友人たちを、もし彼らがウィーンに来たら、国境を越えさせてやると約束した。私たちはリーベン男爵が出国し、無事にブダペストへ逃れた、という絶対に信頼できる知らせを受け取るまで、用心のため待っていた。しかし男爵の逃亡が成功したので、私たちはクリンガーを信用し、友人たちをクラカウからウィーンに呼び寄せた。彼らは私たちの家に身を潜めた。その後彼らはクリンガーから偽のパスポートを受け取り、彼の指示に従って、電車でブレゲンツへ赴いた。そこで誰かが彼らを待ち受け、彼らに国境を超えさせることになっていた。実際にクリンガーは彼らを国境の方へ少しばかり導いて行った。しかし彼は突然〈秘密国家警察の者だ!〉と名乗って、彼らを逮捕したのだった。

当時私たちはその裏切り行為のことを何も知らなかった。しかし数日後、何が起こったのか、気づいた。(。。。) 私たちは便箋を真中で引き裂き、その半分を友人たちに渡し、残りの半分を私たちが保管していた。もし彼らが無事に国境を越えたら、その便箋に手紙を書いて私たちに送り返すよう取り決めていた。実際に私たちは友人たちから手紙を受け取った。しかしそれは取り決めていた便箋に書かれたものではなかった。(。。。) そのため私たちは全てが失敗したことを悟ったのだった。」¹³⁾

後にクリンガーの正体は知られ、抵抗運動闘士たちが警戒したため、大した働きができなく

13) E.Lingens, Das Versprechen, a.a.O., S.77.

なり、1943 年末に秘密国家警察に抹殺された。¹⁴⁾

リングルス夫妻は友人たちのスイス逃亡失敗の顛末から、自分たちの身の危険を感じ、地下に潜るなどの対策を考えた。しかしながら夫のクルトは当時ウィーンの野戦病院で医師として働いていたが、片目が見えないため黒の眼帯をしており、そのために非常に目立つので、すぐに彼だと分かってしまう恐れがあった。またエラは今では自分も「ドイツ国籍」だし、軍医の妻でもあり、さらに一人の幼い息子もいるので大したことはないだろう、逃亡したり、地下に潜る必要はないだろう、と楽観視していた。

しかし間もなく二人は逮捕された。ユダヤ人に援助を行なうことはナチ体制では犯罪とされ、「ユダヤ人援助」として厳しく罰せられた。1942 年 10 月のウィーンの秘密国家警察報告でこの件が報告されている。それによれば、1942 年 10 月 13 日、リングルス夫妻を中心にした 5 名のグループ全員がそれぞれの自宅で逮捕された。

「家宅捜索で有罪を裏付ける資料も発見された。エラ・リングルスは有罪である。ポーランドの抵抗運動の一味であるとの容疑により既に 1942 年 9 月 4 日にフェルトキルヒで逮捕されていたユダヤ人 J. イスラエル、B. イスラエル・ゴルトシュタイン、および彼らの妻であるペピ・ザーラ、ヘレーネ・ザーラたちを彼女は金銭的に援助し、非合法の出国を支援した。さらに彼女はユダヤ人たちの出国を経済的に支えるために、まだ詳細は不明だが、ある人物から高価な装飾品をポーランドから送付されていることも判明している。彼女の夫は妻の陰謀に加担し、特に軍刑務所に収監中の气象台視察官 J.O. ハース博士の逮捕理由を照会した。その際彼は B. イスラエル・ゴルトシュタインを通じて情報提供者に、希望する金額を支払う旨を伝えさせた、との容疑がかかっている。」¹⁵⁾

秘密国家警察はさらにリングルス夫妻が一人のユダヤ人少女を許可なく自宅に住まわせていたことも突き止めていた。エラはその少女のことをこう記している。

「その少女を我が家の子供部屋に匿っていたが、彼女はほぼ監禁状態の状況に耐えられなかった。彼女は外の空気が吸いたい、町中を歩き回りたいと訴えた。それで私たちは、週に二日以外は家に籠っているように取り決めた。週に二日、彼女は早朝に出かけ、夕方、私の家のお手伝いさんの妹の家に行った。そのお手伝いさんの夫は前線に出ており、彼女自身は根っからの反ナチだった。少女はその夜はそこに泊り、翌日も歩き回り、夕方私たちの元へ戻ってきて、

14) Sabine Loitfellner, a.a.O., S.7.

15) Widerstand und Verfolgung in Wien 1934-1945 (Hg.v.Dokumentationsarchiv des österreichischen Widerstandes), Band III. Wien, 1975, S.516.

週の残りを過ごしたのだった。私たちは毎回少女の外出の曜日を変更した。この界限を定期的に歩き回っていることが、黨員に目立たないようにするためである。」¹⁶⁾

さらに秘密国家警察はアメリカ在住のユダヤ人の友人たちからの手紙も発見した。友人たちはウィーンに残っていた彼らの両親の安否を尋ねてきたのだった。彼らはポーランドのユダヤ人だったので、秘密国家警察はリングェンス夫妻がポーランドの抵抗運動と関わりがあると信じた。またエラの有罪の決定的な要因となったのは、彼女がかつて社会民主党組織の活動家だった、ということである。

リングェンス夫妻グループの活動は秘密国家警察にはかなり重要な意味を持ったようで、殊に政治犯捜査局主任は個人的にこの事件に関心を抱いた。彼はエラに、なぜあのユダヤ人たちをスイスへ亡命させようとしたのかと尋ねた。彼らはポーランドのユダヤ人居住地域に連行され、そこの工場で働くだけであり、殺害されることなどなかったのだと説明した。しかしエラはナチスの反ユダヤ主義の理不尽さを指摘し、ある特定の人たちに公園のベンチに座ることも禁じるような民族は世界中の笑いものになるだろう、と反論した。リングェンス夫妻と共に逮捕された医学生は、秘密国家警察からクリンガーはすでに何もかも告白したと知らされ、ユダヤ人を国外に亡命させたことを認めた。後に彼はアウシュヴィッツの絶滅収容所に送られ、そこで発疹チフスで亡くなった。¹⁷⁾

夫のクルトは軍事裁判にかけられ「4週間の拘禁」が言い渡されたが、戦争中で軍医が不足している事情から、自発的に前線行きを申し出れば軍医の将校のまま留まれる、との提案がなされた。しかしながら彼は「自発的に」前線行きを申し出たにも拘らず、降格され、懲罰部隊に送り込まれた。¹⁸⁾

エラはモーリッツプラッツの監獄に4ヶ月間収容された。わずか9 m²の独房に常に3、4名の囚人が押し込められた。また政治犯であるエラには通常許される散歩、読書、新聞閲覧は禁止された。また食事や衛生状態も良くなかったが、後に彼女が送られた強制収容所に比べればはるかに恵まれた状況だった。彼女と一緒に収監されていた約30名の囚人たちの中で彼女がいる間に釈放されたのは僅か2名で、その内1名はナチスの大物シーラッハの庇護を受けての釈放だったという。¹⁹⁾

16) E.Lingens, Das Versprechen, a.a.O., S.79.

17) Sabine Loitfellner, a.a.O., S.11.

18) E.Lingens, Das Versprechen, a.a.O., S.78.

19) Sabine Loitfellner, a.a.O., S.12.

アウシュヴィッツへ

1943年2月16日、もはや取り調べても何も出てこないことを悟った秘密国家警察はエラをアウシュヴィッツへ送ることに決めた。「ユダヤ人の運命にそれほど関心があるのなら、連中と運命を共にするがいい」というのが秘密国家警察の結論だった。²⁰⁾ アウシュヴィッツへ移送される際のことをエラは記している。

「午前3時に輸送列車は目立たないようにウィーン北西駅を出てブリュン、オルミュッツ、ブレスラウの監獄を経由して——その度に囚人が増えた——1943年2月19日の夜にアウシュヴィッツへ到着した。移送の途中で(。。。)一人の警察官が私たちの車両のドアを開けて私に尋ねた：〈お前は一体何をやらかしたのだ?〉ユダヤ人の国外逃亡を手伝おうとしたのだ、と私が答えると、彼は怒鳴った：〈お前のような奴は吊るされたいのだ!〉。彼が行ってしまうと、私たちの車両に座っていた別の警察官が私にバターパンの入った袋を投げてよこした。私が感謝しながら彼を見て尋ねた：〈そんなことをした私に呉れるの?〉〈そんなことをしてくれたからだよ〉と彼は手短かに答えた。(。。。)

1943年2月にはビルケナウの遺体焼却場の側まで続く有名な列車の引込み線はまだ引かれていなかった。50名の男性と34名の女性の私たち囚人はアウシュヴィッツの駅で約20名のSSと数匹の犬に出迎えられた。非常に寒い、星のない冬の夜だった。(。。。)5人ずつ並んで歩くように、との命令の後には、黙ったままの行進となった。私たちは沈黙していたが、神経は張り裂けるほど緊張していた。SSも我々の隣を不機嫌に歩いてしたが、叫んだり、殴ったりすることはなかった。一人の年老いたユダヤ人が〈そんなに速く歩かせないでくれ〉と叫ぶと、すぐに速度を落とした。それを見た私は、もしかするとそれほど酷い所ではないのかもしれない、とつい思ってしまった。²¹⁾

2月20日午前3時にアウシュヴィッツに到着。彼女に囚人番号36088が与えられた。彼女の前に収監されていた36087名の囚人の内、この時点では2万人近くがまだ生存していたという。彼女と一緒に送られてきた34名の女性囚人たちは一年後にはユダヤ人10名全員、および10名のドイツ人の内8名を含む27名が殺害されていた。²²⁾

エラがアウシュヴィッツに到着したときには、絶滅収容所であるアウシュヴィッツはフル稼働していた。しかし彼女はまだアウシュヴィッツ絶滅収容所が恐怖の「殺人工場」であるとい

20) E.Lingens: Eine Frau im Konzentrationslager. (=Monographien zur Zeitgeschichte. Schriftenreihe des Dokumentationsarchivs) Wien, 1966, S.14.

21) ebd., 14ff.

22) Sabine Loitfellner, a.a.O., S.13.

う事実を知らなかった。彼女は死体を燃やしている焼却炉から立ち昇る煙を暖炉からの煙だと思っただけだった。しかし間もなく彼女もその事実を知ることになる。

「それは夜の10時だった。そうすることは許されてはいなかったが、恐ろしい叫び声に驚いた私は立ちあがって、ブロックから外に出てみた。

そのとき私は何台かのトラックが収容所の傍を通り過ぎ、農家のように見えるが、しかし高い煙突のある建物の方へ走って行くのを見た。その後絶え間なく大きな叫び声が聞こえてきた。そして15分後には煙突から炎と煙が立ち昇った。収容所で人間が大量に殺害されていることが私には初めて明白になった。後にはそうしたことを再三に渡って体験することになった。

ハンガリーからの移送がやって来たのは、1944年5月のことだったと思う。その時、43万人のハンガリー人が選別され、大半は即刻労働不能でガス室送りにされ、その死体は焼却された。当時列車はもうすでに女性収容棟の傍を通り、焼却場近くまで入っていた。そこでハンガリー人は下車し、一部は行進して歩いて行かねばならなかった。6週間に渡ってこの黒い、脂じみた煙は絶えず収容所の上空を覆っていた。そして炎が煙突から噴き出していた。焼却炉の隣では大きな炎が上がっていた。そこでは幼い子供たちが生きのまま炎の中に投げ込まれた。その光景を、目の良い囚人であれば一部始終を電流の通っている有刺鉄線の背後にある収容所から見る事ができた。」²³⁾

「殺人工場」アウシュヴィッツをそもそも彼女はどうやって生き延びたのだろうか？戦後、ある学校での講演会で生徒から質問された彼女はその理由を自ら語っている。

「このことは強調しておかねばならないと思いますが、私は収容所では非常な特権を与えられた者たちの一人だったのです。第一に非ユダヤ人はユダヤ人よりもはるかに扱いが良かったのです。第二に非ユダヤ人の中でもドイツ人やオーストリア人は——オーストリア人はドイツ人と見なされました——他のロシア人やポーランド人よりもはるかに扱いが良かったのです。そして第三に医師は特別待遇でした。私が生き延びたのはこうした三つの事情だと感謝しています。私はアウシュヴィッツ到着後、二日目から医師として働くことができました。それは、比較的恵まれた職場、比較的恵まれた労働、そしてまた監視員との比較的恵まれた関係を意味したのです。」²⁴⁾

また囚人である彼女がアウシュヴィッツ到着後二日目から医師として働くことになった経緯を以下のように語っている。

23) E.Lingens, Das Versprechen, a.a.O., S.93f.

24) ebd., S.81.

「私(個人)に関してはさらに特別な(幸運)が加わりました。もう最初の日に数名が呼び出され、その中から囚人スタッフが選ばれたのでした。私たちは服を脱いで裸にならねばなりませんでしたが、その理由は誰にも分かりませんでした。しかしもう何もかもどうでも良かったのです。全員がその場に立ったままで、一人一人 SS の医師の元に呼ばれました。その医師は私にこう尋ねました:〈君はどこの大学で学んだのだい?〉私は親しげに〈君〉と呼ばれたのでした。(。。。) 私は事実を答えました:〈ミュンヘン, マールブルク, それにウィーンです。〉すると彼は私と同じ頃マールブルクで学んでいたと言い、さらに尋ねました:〈私に見覚えはないかい? 誰もが私のことは覚えているよ!〉私は当然ながら彼に見覚えはありませんでした。でも私は、誰もが彼のことを覚えているのなら、覚えていると嘘をついてもたいして危険ではないだろう、と思ったのでした。〈覚えているわ, もちろん遠くからあなただってことが分かったわ。〉そのことで、私は彼から他の人たちよりも良い扱いを、ほとんど同僚のような扱いを受けたのでした。」²⁵⁾

こうしてエラはアウシュヴィッツで医師として働くことになる。そうした好運を彼女は一方で喜ぶと同時に、他方ではその事で自分を責めている。

「私がまだ生きているのは、他人が私の代わりに死んだからではないのだろうか? 私が自分一人で 2 枚の毛布にくるまって一つのベットを占領していたからではないのだろうか? 他の囚人達は一つのベットに 4 名で一枚の毛布にくるまって横になり、決して芯から眠ることができなかったことを知っているというのに。私がまだ生きているのは、死を前にして意識がない患者がもはや食べることのできないパンまで、つまり人より倍の量のパンを食べることができたからではないのだろうか? (。。。) 収容所が (。。。) カオスに陥らないように、SS が作り出した装置の一部である機能を私が果たしているからではないのだろうか? (。。。) 私が権力者にとって不可欠な存在であるが故に彼らは私が生き残ることに価値を置いているのである。そのことは私がこうした途方もない絶滅収容所の小さな歯車であることを意味しているのではないのだろうか?」²⁶⁾

エラはしかし医師としての言わば「特権」を自分のためにではなく、可能な限り他の囚人たちのために利用しようとした。時には自らの命を賭してしようとしたのだ。エラのそうした行為は、囚人たちを死ぬまで利用し尽くし、労役に役に立たない囚人は速やかに殺害しようとするナチスの絶滅政策に対する、ささやかではあるが、しかしながらそれでも勇気のある「抵抗運動」と呼べるであろう。彼女自身こう述べている。

25) ebd., S.82

26) E.Lingens, Eine Frau im Konzentrationslager, a.a.O., S.7.

「私たちの〈抵抗〉とは、もしそう呼びたいのであれば、出来るだけ多くの人々が生き延びるように努めることだった。」²⁷⁾

医師としてのエラ・リングェンス

エラは医師として第9ブロックで働くことになる。このブロックは比較的軽い症状の病人用だった。そのブロックの様子を彼女は伝えている。

「壁側には3段ベットがぶらりと並んでいた。奥の二人が常に押しやられ、1メートルの幅しか彼らには残っていなかった。(。。。) 最悪の時には700名の囚人が約200名用のベットに寝ていた。下のベットには4名、上のベットには3名が寝ており、ベットの板が3名の重みに耐えられず、わら布団と病人共々下のベットに寝ている重病人の上に落下することがたびたびあった。」²⁸⁾

病棟では囚人服に群がっているシラミによってもたらされる発疹チフスが猛威をふるい、死亡率は80%に達していた。発疹チフス以外にも腸チフス、肺炎、丹毒、結核なども蔓延していた。しかしながら患者に与えるべき医薬品は極度に不足していた。エラは医師としてその少ない医薬品をどの患者に与えるべきなのか、深刻に悩んだことを話している。

「もしかすると20名近くの患者がこうした心臓の薬を必要としているのかもしれない。しかし手元には6本ないし7本のアンプルしかない。私は誰にアンプルを与えるべきなのだろうか？重症の患者に与えるべきなのだろうか？というのもそれほど重症ではない患者なら薬がなくとも乗り切るかもしれないからだ。しかしもしかすると重症の患者はアンプルを投与しても亡くなるかもしれないし、もしかすると若い患者の状態が悪化するかもしれないのだ。若い彼女はアンプルをもらえなかったために、死んでしまうかもしれない。そうすれば私は二人の死者を出すことになる。だったら、私はすぐに軽症の患者にアンプルを与え、重症の患者は死ぬに任せるべきなのだろうか？(。。。)」

当時の状況は極めて残酷な思考過程を伴い、残酷な決断を強いるものだった。」²⁹⁾

また別の文章では同じような悩みをこう表現している。

27) E.Lingens, Das Versprechen, a.a.O., S.95.

28) E.Lingens, Eine Frau im Konzentrationslager, a.a.O., S.21.

29) E.Lingens, Das Versprechen, a.a.O., S.91.

「私は薬をまだ子供が自宅で待っている 40 台後半の母親に与えるべきなのか、あるいはまだこれからの人生が待っている少女に与えるべきなのだろうか？もしかするとその薬はすでに体力の衰えた母親にはもはや効かないのかもしれない。また少女の方は、薬を服用できなければ悪化するだろう。あるいは逆だろうか？心臓も問題のないこの少女は助けなくともやっていけるかもしれないし、母親の方もまだ薬で救えるかもしれないのだ。」³⁰⁾

さらには薬の投与に人種問題がからむこともあった。収容所にエラのかつての友人がいた。彼女は若くて美しいエレガントなプラハ出身のユダヤ人女性だった。二人は時折ブロック内を一緒に散歩しながら、昔のスキー旅行などの思い出などを話し合った。その友人がアウシュヴィッツにやって来た頃は夏だということもあり、まだ条件は劣悪ではなかった。友人は寒い冬と発疹チフスを恐れていた。しかし友人はいつでもこう言うのだった：「あなたがいて嬉しいわ。私が病気になっても、あなたが私の面倒を見てくれて、薬も調達してくれるのですもの。私の心臓はさほど丈夫ではないの。」³¹⁾ 友人は保護ブロックの看護師として働いていた。しかし 1943 年末から 1944 年にかけて収容所で発疹チフスが猛威をふるったとき、その友人も感染してしまった。

その頃の収容所では約 7 千名の患者に対し、医師は 15 名しかいなかった。そのためエラは毎日 700 名を越える患者の面倒を見ざるをえず、過労のため勤務が終わる頃にはヘトヘトになっていた。

「当時私は医師として 700 名の患者のために働いていた。私の友人が看護師として働いていたブロックには 1 週間の間、医師は誰もいなかった。まさにそうした数日の間に友人は病気になった。私は夕方、死ぬほど疲れた状態で仕事から戻ると、彼女の様子を見に出かけた。彼女のブロックに私が足を踏み入れるや否や、患者たちは私の白いコートを目にして、あらゆる方向から私に向かって叫んだ：〈先生、先生、私の所へ来て頂戴！酷く痛いの、息ができないの、包帯が必要なの！〉彼女たちは私の手や白いコートの端をつかみ、私をあちこちに引き寄せた。私はさらに医師として働かざるをえなかった。(。。。) 翌日はさらにもっと遅い時間に友人の元へ行き、彼女に注射をしてやった。他の患者の面倒を見るのは拒んだ。(。。。) 患者たちは〈どうして彼女は注射をしてもらったのに、私たちはしてもらえないの？〉と叫んだ。さらにドイツ人のベットからは〈ユダヤ人女性は治療するのに、我々純粋ドイツ人をあんなはのたれ死にさせてしまう！何とも素晴らしいドイツ人囚人だよ、あんなは！〉という声が出た。それは私

30) E.Lingens, Eine Frau im Konzentrationslager, a.a.O., S.23.

31) E.Lingens: Selektion im Frauenlager.: In Auschwitz Zeugnisse und Berichte (Hrsg.v.H.G.Adler, H.Langbein, E.Lingens-Reiner). Frankfurt a.M., 1962, S.105.

がまだ自分が釈放されることを当てにしている時期だった。私は勇気を失った。それ以降、私は若いポーランド人の同僚に友人の様子を見に行ってくれるよう頼んだ。」³²⁾

数日後、友人は亡くなった。エラは自分を責めている。

「私が医師としてもっと良く、継続して面倒を見ていたら、彼女を助けることができたのかどうかは分からない。助けることができたとは思わないが、私は人間として、最後の数日間に彼女が一人ぼっちではない、という気持ちを与えることはできたはずだった。彼女は私を待ち、私のことを信頼していた。それなのに私は行ってやらなかったのだった。」³³⁾

収容所での「選別」

絶滅収容所で定期的に行なわれる「選別」の度ごとにエラは難しい選択を迫られ、医師として、人間として、一人の母親として悩まざるをえなかった。「選別」とはガス室送りにする患者を選び出す作業である。特に囚人たちを酷使する作業が行なえない冬場は、彼らに「餌を与える」のは無駄だということで、囚人の数を減らすため、数週間に一度行なわれていた。エラはアウシュヴィッツの生存者たちの証言や報告を集めた本の中で、その恐怖の「選別」に関して『女性収容所での選別』という報告を行なっている。

「〈選別〉とはどういうものかを私は初めて体験した。それは焼却炉が再び使用され始めた夜から数週間後のことだった。かなりの数の囚人たちが焼却炉に運ばれた。是非とも必要な囚人以外には食料を与えて冬を越させるつもりはなかったのだった。当時私はポーランド人病棟で勤務に就いていた。そこにはたったの13名しか患者はいなかった。ある朝のこと、突然一人の22歳位のSDG(医療班担当)が私たちの所へやって来て、書記の女性に患者たちを集めるように、と命じた。最初はまだそれがどういう意味なのか分からなかった。しかし一人の看護師が私に囁いた:〈選別よ!〉何が起こるのか、今や私にも明白になった。13名の患者たちはブロックの真ん中でSDGの前に立ち、衣服を脱ぎ、その若い男性の前に裸で立った。彼は多少当惑し、落ち着いた様子で順番に彼女たちに目をやり、自分の鼻をつまんだりした。ブロックの中は静まりかえった。私は拳を握り締めて彼の背後に立って、思った。もし彼が誰かを選んだら、彼の喉首に飛びかかってやろう、と。実際に私がそうしていたか否かは、分からない。しかしながらもし自分の意志が他人に伝わるといふことがあるとしたら、その時がそうだったの

32) ebd., S.106.

33) ebd., S.106.

かも知れなかった。彼は誰一人選ぶことができなかったのだから。」³⁴⁾

「選別」担当の兵士は最後に病棟のスタッフの一員で、その場にいなかったクロアチア出身の母娘を呼ぶように命じた。その時娘は発疹チフスから回復したばかりで、骨と皮だけの骸骨のようにやせ細っていた。兵士が娘を「選別」するのは確かだった。娘は掃除婦に過ぎなかったが、エラは、その娘は自分の下で働いている看護師だと偽った。すると兵士は肩をすくめ、黙ってブロックを去って行った。数ヶ月後、エラはその少女に再会したが、彼女は母親と共に勤労配置先の農場で比較的楽な仕事に就いていて、十分な食料も与えられ、美しく、元気ではつらつとしていた。

そうした「選別」から逃れるためにある囚人が取った行動は「選別」の恐怖を物語っている。

ある日「選別」のためブロックの閉鎖が命じられたとき、一人の若い女性が厳寒の中、裸でエラのブロックへやってきて、匿ってくれるよう懇願した。彼女のブロックで選別が行なわれていたのである。病棟ブロックの最年長の囚人はそれを許す勇気がなかった。そんなことをすれば死ぬことになる SS から警告を受けていたからである。2 時間後、エラはその若い女性が病棟の前の死体の山の中に身を投げ入れ、死体の一つを自分の身体の上に引っ張り、選別が終了するまでの間じっと動かずにそのままの状態であることを確認した。そうやってその女性は今回は死の「選別」を免れたのだった。しかしそれがいつまで続いたかは分からない。

信じられないことであるが、収容所で監視のドイツ兵と女性囚人との間に愛が芽生えることもあった。その恋愛事件にエラは巻き込まれ、一つの決断をしなくてはならなかった。ある伍長から、一人の若いユダヤ人女性が発疹チフスに罹っているが、彼女の回復のために必要なことは何でもして欲しい、と丁重に頼まれたのだった。その女性はフランクフルト出身のユダヤ人女性だった。彼女は感染病棟にいて、すでに危機を脱してはいたが、「選別」が行なわれれば、その犠牲となることは明白だった。「選別」の前にエラは彼女の状態を確認するために出かけたが、「選別」の対象となるのは明白だった。その若い女性は不安と絶望に苛まれて非常に興奮し、エラの手にしがみついて助けを乞うた。エラの中で隣人愛と自己保身との間の葛藤が始まった。それ以前に彼女は収容所のドイツ人医師から、近い将来の釈放を約束されていたからだった。また同時に釈放されるまでは目立った行動をしないように、とも忠告されていた。「ドイツ国籍」である彼女がユダヤ人囚人の手助けなどをすれば、SS の反感を買う恐れがあり、彼女がいまだに「ユダヤ人支援」を行なっているとして、釈放が数年間延期される可能性があったのだった。彼女の中で別れて来た息子の「ママ、僕のそばにいて頂戴！」という声、そして助けを求めるユダヤ人女性の声が交錯する。

34) ebd., S.100.

「私の中で自由と生に対する極度の憧憬の念と、この不幸せな女性に対する強い同情の念とが争っただけではなかった。人間として、医師としての義務感と、子供のために命を保持しようという母親の義務感とが争いもした。というのも収容所での一日一日が致命的な危険を意味していたからである。(。。。)。私は悩みに悩んだ。(。。。) もし私が今拒否し、肩をすくめ、もしかすると私が救うことの出来る人間を個人的な危険を恐れるあまり死なせるとすれば、私は過ちを犯したことになるだろう。それはドイツ国民全てが犯した過ち、道徳的な有罪判決で全世界から非難されるであろう過ちである。あらゆる恐ろしいことを指示し、実行したのは決して大勢の人たちではない。しかしながらそれを阻止する勇気がなくて、またもしかすると介入する道を見出したかも知れないのに、〈何が出来ると言うのか?〉とため息をついて起こるがままにした人たちは限りなく大勢いるのである。(。。。)」

私の中で勝利したのは同情ではなかったし、義務の念でもなかった。私の中で勝利したのは私を屈伏させ、私から名誉と自尊心を奪おうとするシステムに対する憎悪の念だった。かくして私は心の中で息子にこう言ったのだった：〈いいかい、お前はもう少し長くママのことを待たねばならないかもしれない。でもその後でママがお前の元に戻って来たら、その場合はママはお前の眼をまともに見ることができるし、お前は自分の母語がドイツ語であることを恥じる必要はないのだよ。〉³⁵⁾

こうしてエラは彼女を「選別」から救ったのである。しかしながら、その彼女の代わりに別の囚人が「選別」されてしまった。

「私は一人の人間を助け出したが、その代わりに別の人間を、まだ生きておろして、そうする権利も有している人物を死の世界へ突き落としてしまったのだった。」³⁶⁾

「選別」によってエラはナチスの絶滅装置の一部として機能せざるを得ない自らの立場を改めて知らされ、苦悩せざるを得なかった。またエラはこの件を通じて、それまで彼女が常に抱いていた推測が事実であることを知ったのだった。「選別」は原則として一定の数の囚人を選ぶことにあり、必要な数の病弱な囚人がいなければ、全く健康で元気な囚人たちも「選別」されざるをえないのである。それまではエラは病弱な囚人が「選別」されるのを避けるため、彼らを隠そうとしていた。比較的元気な患者であれば、なんとか切り抜けていけるのでは、とのはかない希望を抱いてのことである。しかし実際はそうではなかったのである。戦後、ある同僚のユダヤ人女医は「選別」の際に治癒の見込みの薄い重病の患者たちを積極的に「選別」担

35) ebd., S.103f.

36) ebd., S.104.

当兵士の元へ連行し、ナチスに協力的だったと非難され、裁判にかけられたと言う。³⁷⁾ しかしながら当事者にとっては過酷で困難な選択を迫られた上での、ぎりぎりの人道的選択だったと言えるのではないだろうか。

収容所での「出産」

およそ死が支配している、この世の地獄のようなアウシュヴィッツ絶滅収容所で、エラはしかし命の誕生という奇跡にも出会っている。何とアウシュヴィッツで子供が生まれたのである。勤労奉仕を拒否したなどの罪で「ラーフェンスブリュッ青少年教育施設」に収容されていた一人の若い女性が、施設でも素行不良ということでアウシュヴィッツへ送られてきた。

「病棟に 20 歳前後の若いドイツ人女性がいた。濃いブロンドの髪、青い瞳、頬にえくぼの魅惑的な女性だった。彼女は学校の厳しい寄宿舎から追放され、これから人生を楽しもうと考えた矢先だった。(。。。) それは 1944 年初夏の、涼しく、風のある夜のことだった。(。。。) その晩にその若い女性は運ばれてきた。子供が生まれそうで、最初の陣痛が起きていた。

その若い彼女をどこに寝せれば良いのだろうか。ブロックは様々な病気を抱えた病人で溢れていたからである。病人たちはチフス、丹毒、創傷、しょう紅熱に罹っていた。そうした中で出産を迎えるとは！隅に窓とドアの付いた小さいいわゆる〈外来患者診療室〉があった。(。。。) このドアの上にとても清潔とはいえないシーツを被せ、〈手術台〉が完成した。(。。。) そして今からそれが分娩台として機能することになった。

一人の看護師が洗濯室から一枚の清潔なシーツを運んできた。(。。。) それから彼女は消毒室から持ってきたように思われる毛布をドアの上に置き、その上にシーツを乗せた。それで準備は整った。若い女性はとてもエレガントな花柄のパチストの下着を身につけていた。それは彼女の彼氏が毒ガスで殺されたユダヤ人女性たちの持ち物から調達していたものだった。彼女はそうして即興のベットのの上に横になっていた。

私はその傍に立っていた。そして看護師たちの考案の才と行動の手際良さに感心していた。(。。。) 〈どうか、通常の出産になりますように！〉と心の中で独り言を言った。私は出産補助の病棟で 4 週間実習をやったことがあったが、それだけだった。もし出産が順調にいかない場合は、どうすればよいのだろうか？赤ちゃんは頭を前にした正常な姿勢だった。それは触診で確かめていた。赤ちゃんの心音も聞くことができた。全ては順調だった。(。。。) 〈全てが順調に行きますように〉。私たちは運命に懇願した。そして運命は願いを聞き入れてくれた。(。。。)

死と破滅の支配するこの場で、憎悪と絶望、醜悪と戦慄、およそ人間が邪悪に、過酷になら

37) Sabine Loitfellner, a.a.O., S.14.

ざるをえないこの場で、生命が誕生したのだった。新しい、純粋な、無垢な生命が、未来と約束が生まれたのだった。この夜、私達は殺戮する男たちに勝利したのだった。」³⁸⁾

しかしながらこの子供は収容所が連合軍によって解放された直後に百日咳による肺炎で亡くなってしまった。生後 10 ヶ月の生命だった。それでもその子供は死と隣り合わせの収容所の囚人たちにとって「ある別の世界からの光輝く使者」であり、「この世にはまだ別の世界があること、愛と、母親と子供の笑顔の世界」があることを示したのだった。³⁹⁾

アウシュヴィッツからダッハウへ

1944年7月24日、マイダネック強制収容所が赤軍によって解放された。囚人たちはこれからどうなるのだろうか、怯えていた。というもヒムラーの最終命令は全ての囚人を抹殺することだったからである。1944年11月末、彼女は唯一の女性として500名のポーランド人男性と共にダッハウへ向かった。

エラのダッハウ強制収容所の最初の印象は「比較的上等のスポーツホテル」だった。エラは工場の労働者の家に住み、ポーランド、オランダ、ユーゴスラヴィア、ベルギー、ドイツなどの約500名の女性強制労働者の面倒を見ることになった。彼女らは時限爆弾の時計を製造していた「イーゲー・ファルベン・コンツェルン」で働いた。条件は悪かったが、エラは初めて市民生活に戻った、との感じを抱いた。それは戦争末期で市民の生活が困窮し、収容所の生活と大して変りがないようになっていたことも物語っている。

ダッハウでは囚人たちの食糧問題がエラの頭を悩ませ、苦しめ、それどころか彼女の生死を左右しかねなかった。ある日、食料倉庫からソーセージが盗まれていることが判明し、「ユダヤ人に便宜を図った」ために送り込まれてきていたオランダ人囚人たちが、犯人探しのため極寒の中を中庭で数時間立たされた。エラは彼女らを救うため、オランダ人囚人の最年長の女性と盗んだことにして、窃盗を認めようとした。司令官はそのことを信じなかったが、二人は収容所が機能するためには重要な存在だったため、仕方なく二人を処罰することなく、事を収めざるを得なかった。またその頃エラは衰弱した囚人達には仕事に出ずにベットに留まる許可を与えたため、囚人の約10%が毎日の労働を免れていた。この点でも司令官にとって彼女は非常に厄介な存在となっていた。それは同時に彼女の身の危険を意味した。

戦時状況の悪化で、囚人たちが働いていた工場の原料が不足し、囚人たちの大半は工場で働くことが出来なくなった。また食料不足も頂点に達し、食事を与えられないオランダ人囚人たちはベルトコンベアを止め、ストライキを行なった。司令官はストライキの黒幕はエラだとし

38) E.Lingens: Eine Frau im Konzentrationslager, a.a.O., S.27ff.

39) ebd., S.29.

て、今度こそ彼女を始末しようと決心した。

ある SS 中隊長がこの事件を取り調べるようになった。ほぼ絶体絶命の状況の中でエラはしかし窮地を脱したのだった。というのもこの中隊長には監視員の若い愛人がいたが、その愛人は事件前にエラの治療を受け、命を助けてもらっていたのだった。愛人はエラを救うため中隊長を説得し、エラは奇跡的に助かったのである。⁴⁰⁾

連合軍による解放が差し迫った 1944 年 2 月、囚人たちの間で動揺が高まった。終焉が近づいていた。連合軍到来のニュースが再三流れ、ダッハウは混乱に陥った。ダッハウから他の強制収容所へと無意味に追いやられる囚人たちの「死の行進」が開始された。最後には全てのドイツ人、ロシア人男性のダッハウからの移送が行なわれることになった。しかし収容所の規律はすでに非常に杜撰になっており、囚人の多くが逃亡、ないしは隠れることができたが、それでも約 8 千名の男性がいわゆる「死の行進」に追いやられた。

1945 年 4 月 29 日、収容所に白旗が掲げられ、SS は収容所から姿を消してしまった。そして遂にアメリカ軍がやってきて、囚人たちは解放された。

再びウィーンで

1945 年 5 月、エラは 2 年 2 ヶ月振りに故郷のオーストリアへ戻ってきた。その時の母親との再会の様子を息子ペーター・リングェンスは「私の目を最も引いたこと、そして母であると見分けるのに最も苦労したこと、それは母の髪が真っ白だったことである」と書いている。⁴¹⁾ しばらく休養した後で、彼女はケルンテン州のラース結核療養所で医師として働くことになった。

1948 年、収容所での体験を綴った『恐怖の囚人たち』を出版する。またウィーンから電車で 40 分ほどのバーデン近郊アラント療養所で医師として働くことになった。また 1964 年から 65 年には、フランクフルトで行なわれた「アウシュヴィッツ裁判」で証人として 22 回も出席し、自身の体験に基づいた衝撃の証言を行ない、注目を浴びる。

1966 年には『強制収容所の一人の女性』を発表。1973 年にエラは 65 歳で退職し、余生をウィーンで過ごしている。1980 年にはイスラエルのエルサレムにあるユダヤ人犠牲者の追悼公園にリングェンス夫妻を表彰する「諸民族の正義の人びと」という名誉のメダルが飾られた。晩年、エラは孫と共に幸せな生活を送り、こう書いている。

「初めて当時の映像が色あせ始めた。初めて私は、膝に乗った孫のマキシミリアンと過ごす最近の数年間が、アウシュヴィッツの数年間よりも重要であると感じた。」⁴²⁾

40) Sabine Loitfellner, a.a.O., S.22ff.

41) E.Lingens: Gefangene der Angst. a.a.O., S.7.

42) ebd., S.18.

2002年12月31日、エラは95歳の生涯を閉じる。彼女は死に際して、ハンス・ザールの以下の詩を自分の墓の前で朗読してくれるように頼んだ。それはエラの生涯と世を去る彼女の気持ちを表したものと言えよう。

私は間もなく死ぬことが分かっている、
もう十分すぎるほど私はこの世の客人だった、
(。。。)

死を自覚したいま、私は疲れ果て、
もう飽き飽きした、と言うだけである。
(。。。)

(。。。)
民族を破滅させ、民族を裏切った者たちの世紀、
その世紀と私はもうほぼ同じ年齢である。

さあ友人たちよ、一握りの土を手に取り、
別離のために私の歩いていく道の上にまいておくれ。
私は間もなく死ぬことが分かっている。
一人の客人は残念ながら杖を取り、去って行くのだ。⁴³⁾

彼女の死から3年半経った2006年6月14日、彼女の人生と業績を讃え、ウィーンに彼女の名前を冠した「エラ・リングェンス・ギムナジウム」が創設され、校名の命名式が盛大に行われた。

おわりに

アウシュヴィッツへ囚人として送り込まれた一人の「ドイツ国籍」の女性医師エラ・リングェンスの生涯をたどってきたが、改めて彼女の不当不屈の精神に敬意を表したくなる。彼女は自らが不幸の底にあっても、常に他人を助け、自分の政治的信念を貫き通したのだった。彼女は地獄のような強制収容所の中でも生き延び、抵抗を続けてきた。その抵抗を支えた理由はただ一つである。

43) Dr.Ella Lingens (Hrsg.v.Ella Lingens Gymnasium) Wien, 2009.

「ナチ強制収容所での無限に続くように思われた数年間、抵抗した理由は、強制収容所で私達が何を目にし、耐えてきたかを世界に向かって語る事ができるためにである。ナチスの行なった絶滅の手法は、その犠牲者と共に消えさるべきではないのだ。」⁴⁴⁾

44) Sabine Loitfellner, a.a.O., S.25.